



高田敬輔とその門人

滋賀県立琵琶湖文化館
学芸係長 上野良信

1. はじめに

高田敬輔^{たかだ けい ぼ}は、近江蒲生郡出身の江戸時代中期の狩野派の画家です。狩野派は、室町時代後期足利幕府の御用絵師となった狩野正信^{かのう まさのぶ}によって始められた日本画の一大流派で、当時中国よりもたらされた水墨画という新しい分野の絵画を積極的に学び、水墨画における墨色や筆使いの力強さと、従来の彩色画における色彩の鮮やかさを調和させた画法を完成させ、日本人の好みにあった水墨画として、おおいにもてはやされ、特に気骨あふれる画風が武人的気質ともよく合い、将軍家をはじめ武士階級に広く支持され、以後四百年の長きにわたって絵画界の王者的な位置をしめることとなります。京都を中心に活躍していた

狩野派ですが、江戸に幕府が開かれるとともに、その主力は江戸に移ってしまいます。しかし、京都に残りその伝統を守ろうとする一派もありました。近江出身の狩野山楽^{かのう さんらく}を祖とする流れで、京狩野といわれました。高田敬輔は、狩野山楽より四代目の狩野永敬^{えいきょう}に師事して、京狩野の画法を学び、のち室町時代の水墨画の巨匠雪舟に魅せられ、その画法を取り入れ、敬輔独自の画法を完成させて一家を構えることとなります。また敬輔は、信仰心が強く、自ら経典などの仏教書を研究し、仏画も多く描くなど、広範囲な活躍を見せていますが、今日狩野派の画家としての敬輔の画名はあまり有名ではありません。それは敬輔自身中央で活躍することに固執しなかったためかもしれません。しかし、その遺作にみる力強い筆使いは、敬輔の画技の高さを評価するに十分であり、また曾我蕭白^{そがしょうはく}、月岡雪鼎^{つきおかせつてい}という異色の門人を出していることも画家敬輔を知るうえに重要なウエイトをしめています。

2. 高田敬輔

高田敬輔は、延宝2年(1674)近江蒲生郡日野町大窪に、高田俊隆の子として生まれました。敬輔の祖先は藤原氏の出身で、六代目の満輔のとき高田姓を名のるようになり、永禄年間(1558-69)に織田氏に仕えて尾張に住み、敬輔の曾祖父にあたる輔之の代になって日野に住むようになりました。敬輔の生まれた日野町大窪は、蒲生氏の城下町の中心として栄えたところです。

敬輔というのは画号で、実の名を隆久といい、のち高田家代々の徳左衛門を襲名しまし



高田敬輔画像・島崎雲圃筆



高田敬輔・竹林七賢図

事に興味を覚え、独学で絵の基本を身につけたようです。本格的に絵を学んだのはいつごろか定かではありませんが、はじめ京都の狩野永敬に学んで、狩野派の画法を修めました。敬輔という画号は、おそらくこの時、永敬から敬の字をもらって付けたものと思われる。永敬のもとで順調に実力をつけていった敬輔ではありましたが、やがて永敬のもとを去ることになります。それは師の死去によるものか、また別の理由があったのかは不明です。その後画僧古潤と出逢うわけですが、これが敬輔に一大転機をもたらすことになります。古潤は浄土宗の僧ですが、絵を狩野永敬の父永納えいのちゆうに学んでおり、敬輔にとっては同門の先輩にあたる人でした。また古潤はとくに雪舟の画法を慕い、雪舟風の絵を多く描いています。こうした絵に接した敬輔は、狩野派の原点ともいべき室町水墨画の魅力にとりつかれ、自らも雪舟の画法を習得し、独自の画風を完成させます。

また敬輔は、水墨画のほかに、日本の仏画を研究し、多くの仏画を描いています。それは、元來信仰心が厚かったことでもあります。華嚴宗けおんしゅうの鳳潭宗叡ほうたくそうえいや浄土宗じょうどしゅうの良照義山りょうしやうぎざんなどの高僧との交流によるところが大きかったようです。正徳3年(1713)敬輔40歳の時、浄土宗の祖法然上人が著した、念仏による往生

た。画号は敬輔のほか、竹隠斎ちくいんさい、梅桃老人ばいとうらじんなどがあり、また眉間の黒子から長い毛がはえていたので眉間毫翁みけんごうおうともいいました。敬輔は幼少より絵

の功德を説いた『選択集』せんじやくしゅうを絵画化した「選択集第十六章之図」を描き、それが知恩院にいた義山の目にとまり、そのできばえのよさをほめられ、翌年その図を版木におこして版画を製作し、人々の好評を得たのに気をよくし、ひき続き阿弥陀如来の極楽浄土を説いた「無量寿経曼荼羅図」むりやうじゆきやうまんだらずを義山の教えを受けながら描いて、再び好評を得たようですが、この図はすぐには版画化されず、約30年後の延享2年(1745)敬輔の息子三敬によって版画化されました。ちなみにこの両図の版木は、敬輔の末裔日野の高田家に現在も保存されています。このようにして敬輔は、仏画の名手との評判がたち、その名声は皇族にまで聞こえ、仁和寺法親王は、特に命じて「天下和順図」を描かせたほどです。こうした功績が認められ、享保8年(1723)50歳で法橋ほっきやうという位を得て、より一層の作画活動を展開し、10年後の享保18年(1733)画家の最高位である法眼位ほうがんをもらい、それから高田法眼と称するようになりました。仏画の名手としてもてはやされた敬輔でしたが、その本領とするところは、狩野派の画法に根ざした肉太の筆法による水墨画です。山水図、道釈人物画などに見る力強く生き生きとした筆法は、見るものを圧倒するほどの迫力があります。

また、敬輔は旅を好み、放浪の画家というほどではありませんが、各地を巡り、その風物を見聞きして、自らの画風の形成に役立てたようです。寛保3年(1743)から2年間は江戸に滞在し、かねてから親交のあった諸大名家に出入りして、精力的に絵を描いています。その間、作品を將軍の観覧にも供しました。延享2年(1745)郷里日野に帰ってきた敬輔は、自宅に梅桃庵というアトリエを建てあいかかわらず画業三昧の日々を送っていました。特に、この間の遺品に敬輔の代表作が多く、菩提寺である信楽院しんがくいんの本堂天井を飾る雲龍図、八大龍王図などは、敬輔芸術の集大成ともいべきもので、力強い水墨の筆法がい

かんなく発揮されており、狩野派伝統の迫力ある雲中に躍る巨龍を見ることができます。その他同じく信楽院にのこる71歳の時の竹林七賢図屏風、最晩年82歳の時の維摩像などの代表作を残して、宝暦5年（1755）12月4日82歳の長寿を全うしました。

3. その門人たち

敬輔には四人の男子がありました。長男は名を正輔、父の名を襲名して徳左衛門と称し父に絵を学んで、画号を三敬といい、また竹隠二世を名乗って活躍し、父と同じ法眼位をもらっています。また絵の他に茶道、華道などにも優れた才能をみせ、明和3年（1766）6月10日、63歳の生涯を終えています。

二男敬次も藤兵衛と称して、絵を描いていたようですが、詳しくはわかりません。

三男保高は、谷田家の養子になりますが、その子伯修は、敬輔画の伝統を引き継ぎ、輔長と号して多くの絵を描いています。また輔長は、敬輔の遺作やその愛蔵していた和漢の古い絵を縮図にして「敬輔画譜」を版行しました。輔長の子一徳も絵を描き、竹隠三世を名乗って活躍したようです。

四男は雲太郎、長治といましたが、十代で早死にしています。

また、敬輔の弟長兵衛は、中沢家の養子となって、呉服の行商を家業としていましたが、兄敬輔に感化され、敬真とって絵を描き、特に仏画を得意としました。

こうした親族以外にも、敬輔には多くの門人がありましたが、そのうち目覚ましい活躍をみせたのは、数人程度です。

敬輔の肖像画（日野町・高田家蔵）の作者として有名な島崎雲圃（1730-1805）もその一人です。雲圃は、日野町大窪に生まれ、はじめ同郷の儒者建部箕山（1725-82）の門人になります。のち敬輔に絵を習い、画家として活躍することになります。雲圃の描く肖像画は、敬輔晩年の姿をよく伝えており、眉間毫翁の由来ともなった、眉間の間の黒子からの

びる一本の長毛まで克明に描かれています。この絵だけでもその力量が押しはかれます。また雲圃の家が下野国（栃木県）



會我蕭白・楼閣山水図

茂木に店をもっていた

関係から、雲圃も時々訪れ絵を描いています。なかには栃木県の指定文化財になった作品もあります。

若いころ敬輔に学んだといわれる會我蕭白は、享保15年（1730）京都の商家に生まれました。本姓を三浦氏、字を師龍、暉雄、暉一などといい蕭白、鸞山、鬼神斎などと号しました。蕭白がいつごろから絵を始め、いつごろ敬輔に師事したかは明らかではありませんが、敬輔の没年である宝暦5年には、蕭白が26歳でしたから、それ以前、おそらく20歳前後のころであったろうと思われます。蕭白が敬輔に師事して、その影響を受けるようになった時には、敬輔はすでに相当な年齢をかさね、その画風は完成され、老練な中にも力強さをかねそなえた力作を描いていた時期です。蕭白が敬輔より学んだと思わせる点は、蕭白の種々の作品の中に見いだすことができます。人物画の生き生きした筆法や空間を大きく使った構図、濃淡の墨の使いわけなどは、敬輔と共通の特徴です。のち會我蛇足（室町時代の水墨画家）を慕って、自ら蛇足十世、蛇足真下孫などと称してその作風をまね、さらに雲谷派（雪舟画の様式を受け継いだ流派）の作風を交えて、まったく独創的な画風をつくりだしました。元来、會我派の画風は室町水墨画の系統をひく保守的なものですが、濃

い墨を用い、荒々しい筆使いで描く樹木や岩など、いささかあくの強い作風に特色があります。この特色を一層誇張したのが蕭白の作品といえます。蕭白はあまりにも個性が強かったため、奇人とか異常性格の持ち主などといわれ、時に狂人あつかいされたといいますが、絵の上にもそれがよくあらわれており、怪醜と悽慘をきわめたものを多く描いています。天明元年(1781)正月7日、52歳で波乱の生涯を終えた蕭白は、敬輔の画法を伝え、曾我派の伝統を引き継いで独自の画風をつくりだし、非常に的確な技巧のさえを持っていながら、その制約にあえて反逆するかのよう荒々しい筆法や、人物や動物に見られる怪奇な表情は、しばしば当時の美的評価からかけはなれたものとしてあつかわれてきましたが、近年その芸術の再発見として脚光をあびています。平成4年に近江神宮所蔵の楼閣山水図屏風が重要文化財に指定されたのも、こうしたもののあらわれです。

大阪を中心に、浮世絵師と活躍した^{つきおかせつ}月岡雪^{てい}鼎も敬輔の門人です。雪鼎は、宝永7年(1710)



月岡雪鼎・業平東下り図

蒲生郡日野町大谷に生まれました。本姓は木田氏、名は昌信といい、雪鼎は画号です。雪鼎がいつごろ敬輔に師事したか詳しいことはわかりませんが、仮にこの

時期を雪鼎20歳ごろとしますと、敬輔はすでに60歳前の老いてますます力強い作品を描いていた時期であり、画家を志す雪鼎にとってまたとない師匠であったことでしょう。郷里で敬輔について絵の基本を学んだ雪鼎は、のち大阪に移り住んで名をあげるわけですが、その作風の基本は、敬輔の謹厳な作画態度や的確な運筆に求めながら、日本の古典や中国の筆法を研究して、独自の画法をつくりあげ、敬輔とはその生き方を異にする浮世絵画家として大成していきます。雪鼎が最も得意としたのは美人画でした。多くの美人画を描いて上方では^{にしかわすけのぶ}西川祐信と並び称されるほど、肉筆浮世絵画家として評判となり、雪鼎様式といわれる独自の美人画を完成させ、のちの画家たちに多大な影響を及ぼしたのです。また美人画以外にも優れ、花鳥などの絵も描き、^{まるやまおうきよ}円山応挙なども雪鼎の画法に少なからず影響を受けた一人です。雪鼎はこのような絵の功績により、法眼位をもらいました。上方では浮世絵画家多しといえども、法眼にまでなったのは雪鼎ぐらいのもので、それだけ見ても雪鼎の力量のほどがうかがわれます。画名があがるとともに、その門人も増え、子供の雪斎、雪溪をはじめ、石田玉山、桂雪典、黒井武禅などの多くの門人を従えて、月岡派という一大勢力を誇りました。雪鼎は天明6年(1786)12月77歳でその生涯を終えましたが、今日盛んに催される肉筆浮世絵展には必ず雪鼎の作品が出品されており、その人気のほどはおとろえることはありません。

滋賀文化財教室シリーズ No.147号

発行年月日 1994年12月15日
 編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
 〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
 TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525